

## 新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

森 田 雅 也  
雲 岡 梓  
吉 田 健 剛

本稿は、関西学院大学図書館蔵『西山宗因独吟百韻』

(30714/A-4542) の翻刻である。本書は『西山宗因全集

第二巻 連歌篇二』<sup>(1)</sup>に収載される『朝霧や』百韻』の

異本である。『西山宗因全集』の底本となった綿屋文庫

本には、明石人丸山月照寺本、沖森文庫本の異本が存在

していることは知られていたが、昨年度関西学院大学に

新収された本書はその沖森文庫本である。箱裏に「沖森

文庫」所蔵印があり、来歴とともに相違ない。端作と賦

物を欠く点や本文の異同も同様である。なお、綿屋本・

月照寺本・本書の三本の前後関係は不明である。

### 【書誌】

底本 関西学院大学所蔵本。

体裁 紺色料紙巻子装。一軸。箱入。箱には「西山宗因

独吟百韻 宗因自筆」と墨書された紙が同封され

る。見返しには松が四本並び、その上を鳥が三羽

群れ飛ぶ絵柄が墨で描かれる。これは三物「朝霧

やのぼりての代の岡の松／ながめは尽ぬ海づらの

秋／浦風に友よぶ千鳥雁啼て」に照応するとみられる。

寸法 一五・六×二二・〇（糲）。本紙六枚貼継。

成立 延宝二（一六七四）年七月一日。

題簽 なし。

端作 なし。

賦物 なし。

印記 本紙なし。箱裏に「上野本町 沖森藏」の印。

異本 綿屋文庫所蔵宗因自筆卷子本『播州明石浦人麿社法楽賦御何連

歌百韻』、月照寺所蔵宗因自筆懷紙『賦御何連歌

百韻』

### 【凡例】

一、本稿の底本には関西学院大学所蔵本を用いた。『西山宗因全集』の翻刻に拠って、綿屋文庫本、月照寺本と対校し、異同を示した。

一、異本との異同は、該当箇所括弧（ ）を付して示した。なお、綿屋文庫本を「綿」、月照寺本を「月」

と略記した。

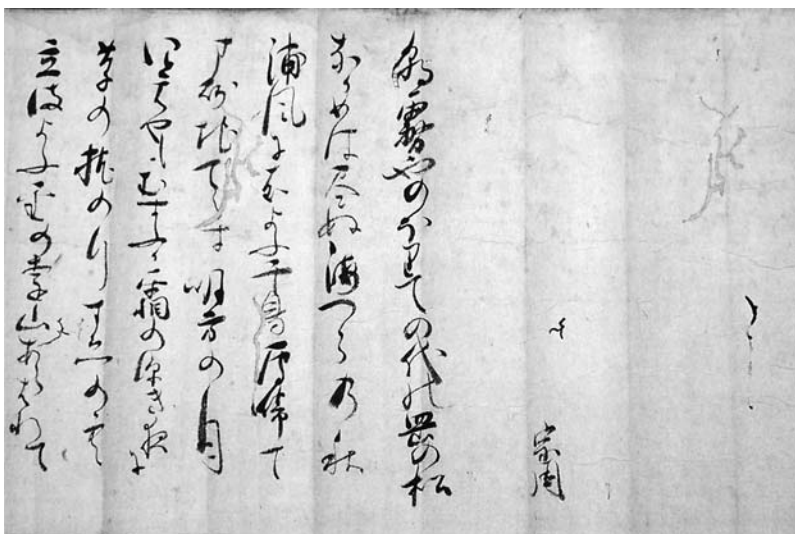
一、翻刻に際しては、以下の事項を除き、原文の表記に従うことを原則とした。

一、旧字・異体字は原則として通行の字体に改めた。

一、本文には読みやすさを考慮し、適宜句読点・濁点を付した。

一、本文中の連歌には、私に番号を付した。

一、端作・賦物・奥書は綿屋文庫本によって補った。



【翻刻】

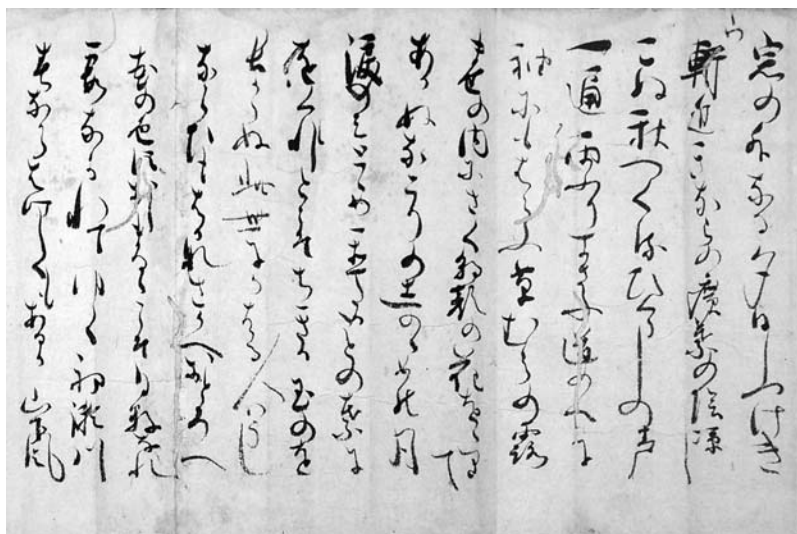
（綿、月・延宝二年七月十一日

播州明石浦 人麿社法樂）

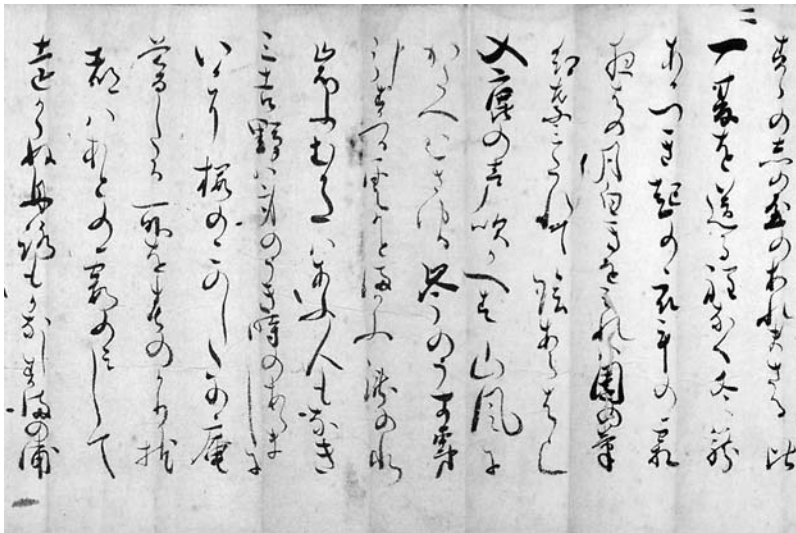
（綿、月・賦御何連歌）

宗因

- 1 朝霧やのぼりての代の岡の松
- 2 ながめは尽ぬ海づらの秋
- 3 浦風に友よぶ千鳥雁啼て
- 4 ま砂地てらす明方の月（月・月の明がた）
- 5 いとはやもむすぶか霜の深き夜に
- 6 草の枕の行すゑの空
- 7 立まよふ雪の遠山あらはれて

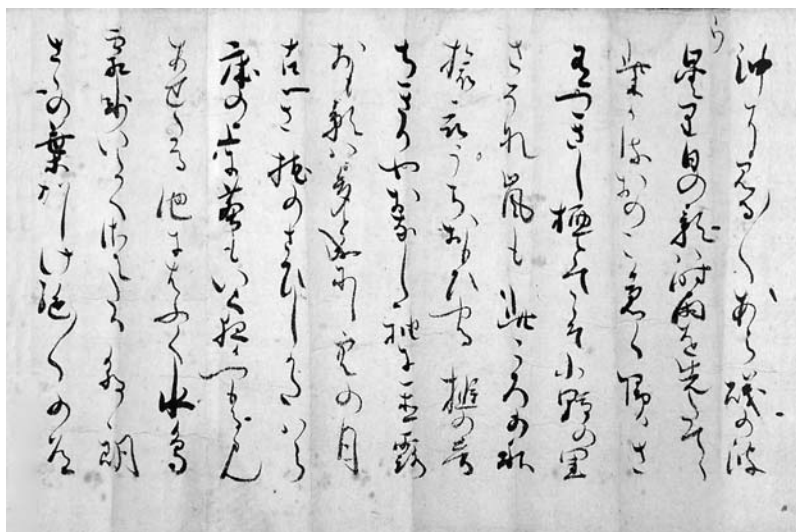


- 8 窓の外なる夕日しづけき  
9 ウ軒近きならの広葉の陰涼し  
10 こぬ秋つぐるひぐらしの声  
11 一通雨ふりすさぶ道のべに  
12 袖にもはらふ草むらの露  
13 ませの内にさく朝顔の花を、りて  
14 あかぬなごりの（月・なごりは）しの、めの月  
15 涙のひとめ置たる（綿・かねたる）ことの葉に  
16 をくれじとこそちぎる玉のを  
17 長からぬ此世にかはる人はうし  
18 ならひもはかなさかへおとろへ  
19 花の色におしまるゝこそ（綿、月・おしまるゝこそ  
猶）日数なれ  
20 霞ながれてゆく初瀬川  
21 春ながらはげしくもあるか山風

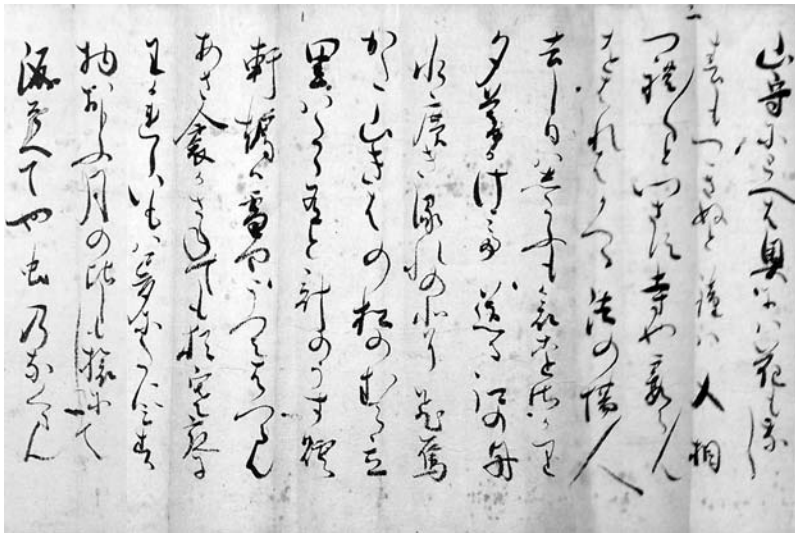


新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

- 22 すゝのしの屋のあれまさる比  
23 二一夏を送る程なく冬籠  
24 あかつき起の衣手の霜  
25 夜はの月白きをみれば園の菊  
26 紅葉みだれて陰あらはらし（綿、月・陰まばら也）  
27 入鹿の声吹かへす山風に  
28 かたへはきゆる岑のうす霧  
29 引すつる雲かとまがふ瀧の水  
30 岩ふむかたはあふ人もなき  
31 み吉野は身（綿・世）のうき時のあらましに  
32 いか桜のこのしたの庵  
33 暮したる所を春のかり枕  
34 都はあとの霞のみして  
35 遠からぬ舟路もかなしすまの浦

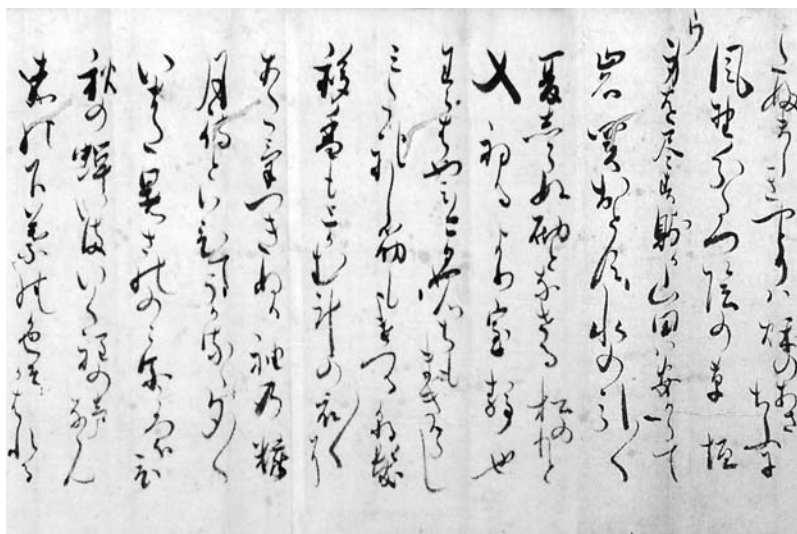


- 36 沖に見るくあら磯の波  
37 ウ曇り日の影は時雨を先だて、  
38 柴かるおのこ急ぐ帰るさ  
39 有つきし栖とてこそ小野の里  
40 さぞな嵐も（綿、月・あらしもさぞな）此ごろの秋  
41 旅衣うちおもひやる槌の音  
42 ちぎりやおなじ袖に置露  
43 おも影は夢と成にし空の月  
44 古き枕のさびしかたはら  
45 床の上に塵もいく夜かつもるらん  
46 あせたる池にはぶく水鳥  
47 霜氷いたくさえたる（月・寒ぬる）朝朗  
48 さ、の葉かしげ絶くの道



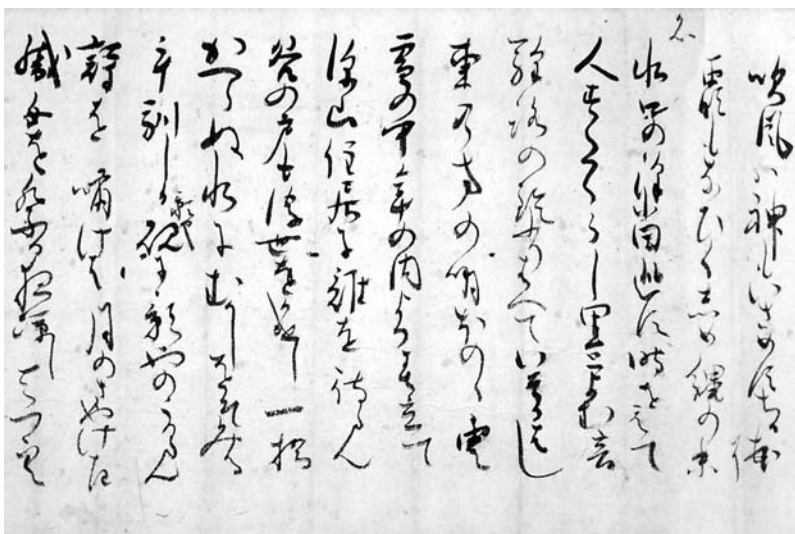
新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

- 49 山守にとへば奥には花もなし  
 50 春もつきぬと鐘は入相  
 51 一つれと門さす寺や霞らん  
 52 をはればかへる法の場人  
 53 去し日は（綿、月・去し日を）したふも哀遠ざかり  
 54 夕暮かけて送る江の舟  
 55 水広き流れの北に飛鴉  
 56 かた山ぎはの松のむら立  
 57 里はたゞ有と計のうす煙  
 58 軒場は雪や（綿、月・雪や軒端を）うづみはつらん  
 59 あさ袈かさねても猶寒夜に  
 60 わかれしいもは夢にだにみず  
 61 物おもふ月の比しも旅にして  
 62 涙そへてや虫のなぐらん



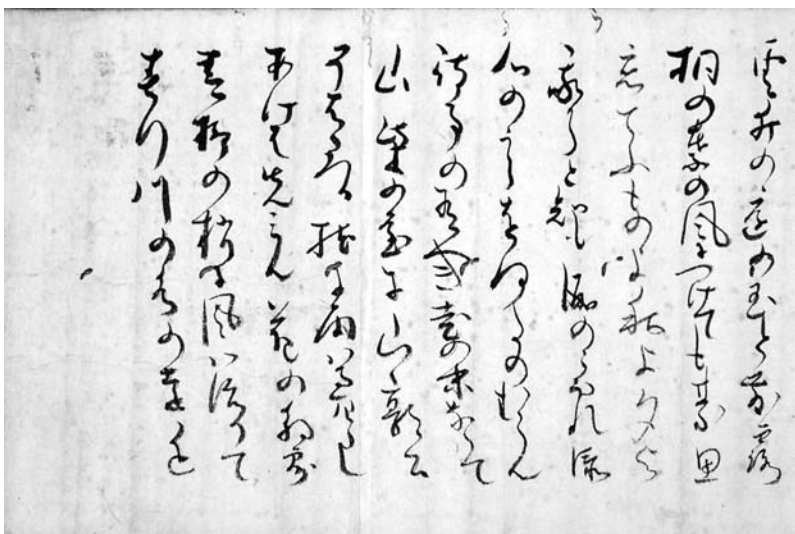
- 63 たふまじきやどりは秋のあさぢふに  
64 風野分たつ陰の草垣  
65 ウ身を尽す賤が山田は安からで  
66 岩関おとす水の引く  
67 夏しらぬ砌となれる松のもと  
68 入初るより室静也  
69 わらはやみ今日や心ちもまぎるらし(月・まぎるらん)  
70 みだれし筋も(綿、月・筋を)けづる朝髪  
71 移香も(綿、月・は)とがむ計の衣くに  
72 あだ気つきぬる袖の粧  
73 月待といひてうかる、夕く  
74 いまだ暑さののこるころほひ  
75 秋の蟬いまいく程の声ならん  
76 森の下葉の色ぞかはれる





新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

- 77 吹風は神もいさめずちる花に  
78 霞もなびくしめ縄の末  
79 名水口の沢小田返す時をえて  
80 人すだくらし里とよむ音  
81 駅路の鈴ふりはへていそがはし  
82 東の方の（月・かたは）明ぼの、の雲  
83 雪の中年の内より春立て  
84 深山住居に誰を待らん（綿・らし）  
85 谷の戸も浮世をかけし（綿、月・かくる）一橋  
86 かへらぬ水にむかしをぞみる  
87 手馴しか（「か」の右に「影や」と同筆後補）硯に  
影や（綿・かげや硯に）のこるらん  
88 詩を囁けば月のさやけさ（綿・月ぞさやけき）  
89 織女を（綿、月・七夕を）祭る夜涼し天つ空



- 90 雲井の庭の玉と散露  
 91 桐の葉の風につけても憂思  
 92 恋てふものよ秋よ夕よ  
 93 ウ我からと知も涙の（月・我からのなみだと知も）  
 こぼれ添  
 94 心のうらを何たのむらん  
 95 待事の（綿、月・待事は）有べき老の末ならで  
 96 山柴の屋に山郭公  
 97 そばだつる枕に雨は過けらし  
 98 あけば先みん花の朝露  
 99 青柳の梢に風は治りて  
 100 春行川の鳥の遠近  
 （綿・或人依所望、染老筆。

註(1) 『西山宗因全集 第二卷 連歌篇二』(八木書店、二〇〇七年八月)

本研究は、科学研究費基盤研究(C)(課題番号…24520252)「地方談林俳諧文化圏の発展と消長」西鶴の諸国話の方法との関係から」として補助をうけた成果の一つである。

(もりた まさや・関西学院大学文学部教授)

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)

(よしだ けんこう・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程二〇一三年修了)